

## Two patients developed symptoms suspicious of fibromyalgia after HPV vaccination

札幌社会保険総合病院<sup>1</sup> 札幌医科大学小児科<sup>2</sup> 浦河赤十字病院小児科<sup>3</sup> 北海道立江差病院小児科<sup>4</sup>

木澤敏毅<sup>1,2</sup> 川村健太郎<sup>3</sup> 久保憲昭<sup>3</sup> 寺井紀雄<sup>4</sup> 堤 裕幸<sup>2</sup>

*Sapporo Social Insurance General Hospital*

Toshitaka Kizawa

子宮頸がんワクチン後に慢性疼痛が出現・増悪し、線維筋痛症の診断基準を満たした2例を経験した。症例1, 11歳女児 24年7月の子宮頸がんワクチン後に前胸部痛と両手のしびれを自覚し、近医受診。レントゲン・骨シンチ等の画像検査にて異常を認めず、12月当科受診。血液検査では異常を認めないものの、診察上圧痛点陽性等の線維筋痛症の診断基準を満たした。ノイロトロピン、リリカにて薬物療法を行ったが、無効であった。時間経過とともに症状の改善を認めるも、25年2月に子宮頸がんワクチン3回目実施後に症状の増悪を認めたため、ワクチンとの関連を強く疑った。症例2, 13歳女児 24年6月の子宮頸がんワクチン後より下腹部を中心に全身の疼痛を訴え、疼痛のために日常生活が制限された。自然軽快傾向であったが、8月に2回目のワクチンを実施した際に症状の再燃を認めた為、近医受診。画像検査や血液検査にて異常を認めないため、当科紹介となった。線維筋痛症の診断基準を満たしていたことから、ノイロトロピンによる治療を開始し、症状の著明な改善を認めた。ワクチン実施後に症状は増悪しており、子宮頸がんワクチンとの関連を強く疑った。2例ともNSAIDsは無効であり、1例はノイロトロピンが著効した。2例とも小児期発症線維筋痛症に特徴的にみられる心理的背景や性格傾向は認められなかった。